第3章 出土遺物

第1節 概要

出土遺物の総点数は 120 点である。内訳は、須恵器 32 点、勾玉 7 点、ガラス玉 28 点、臼玉 34 点、捩り環頭柄頭 1 点、三輪玉 1 点、馬具 7 点、刀子 1 点、鉄鏃 9 点である。その他、須恵器の小破片が数点出土している。

出土位置は、概ね玄室と前庭部に分けられ、須恵器の破片1点のみ墳丘上から確認されている。玄室の 礫床直上から、須恵器・玉類・鉄製品が出土している。玉類は、埋土の掘削中だけでなく、ふるいによる 選別作業からも確認されている。

種別によって出土位置に違いがある。まず玄室の遺物は、須恵器は南側を中心に一部北側、馬具は北西部、捩り環頭柄頭及び三輪玉は北東部、刀子・鉄鏃・玉類は東側中央に位置している。次に、前庭部の遺物は全てが須恵器であり、中央から入口にかけてまとまって出土している。

第2節 須恵器 (1~32)

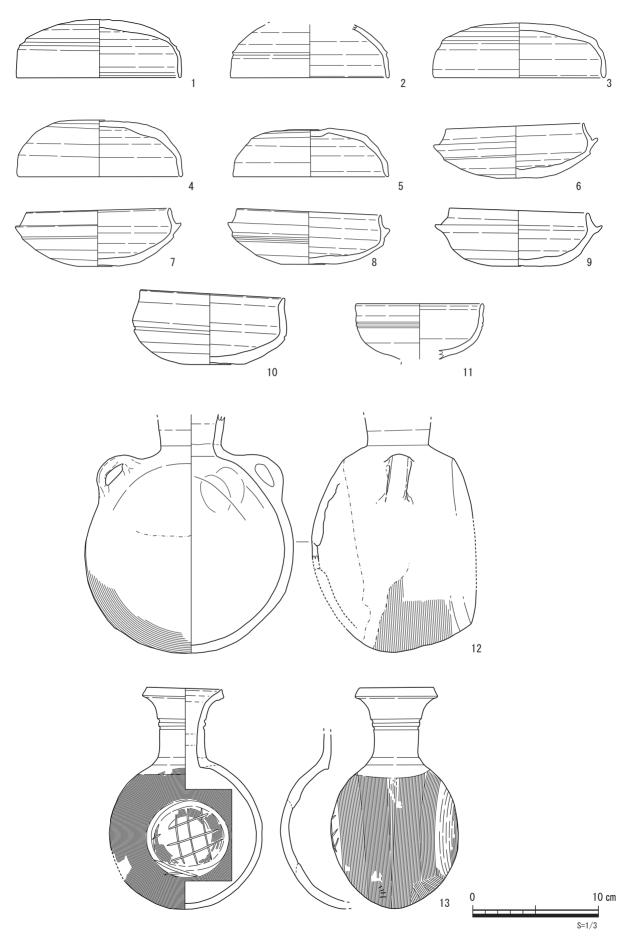
玄室 玄室から出土した須恵器は1~13である。器種は、坏蓋・坏身・高坏・提瓶に分類される。

 $1\sim5$ は坏蓋である。 $1\cdot2$ は、天井部はなだらかな丸味を帯び、天井部と口縁部の境には明確な段をなす。1 の口唇部は内側で段をなし、2 は丸くおさめる。口径・器高は、1 が 13cm・4.6cm を測る。2 は、天井部が欠けているため器高は不明であるが、口径は 12.6cm を測る。 $3\sim5$ は、天井部はやや扁平で、口唇部は丸くおさめる。3 の口縁部は内湾気味になり、 $4\cdot5$ はやや外側に開く。口径・器高は、3 が 13.4cm・4.3cm、4 が 12.9cm・4.4cm、5 が 12.3cm・3.8cm を測る。

6~10 は坏身である。6~8 は、底部はゆるやかな丸味を帯びて立ち上がる。底部と受部の境は明瞭な段をなし、受部は斜上方に短く突き出る。口径・器高は、6 が 10.9cm・4.4cm、7 が 11.4cm・4.4cm、8 が 11.4cm・4.2cm を測る。9 は、底部は平らで口縁部にかけて丸く立ち上がる。受身は斜上方に短く突き出す。口縁部は中位で屈曲し直立してのびる。口径・器高は、11cm・4.4cm を測る。10 は、底部の中央が平らで丸く立ち上がる。口縁部は内湾し、口唇部は外反する。外面中位には 1 本の凹線が巡る。口径・器高は、11.5cm・5.9cm を測る。

11 は無蓋高坏の坏部である。脚部は確認されていない。坏部は深めで丸みがあり、外面中位には 2本の 凹線が巡る。口縁部は直線的に立ち上がり、端部はやや外反する。口径は 10.2cm を測る。

12・13 は提瓶である。12 は、肩部に環状把手がつく。体部はカキメ調整が施され、側面は D 字形を呈する。口縁部は確認されていない。体部最大径 16.6cm、最大幅 13cm を測る。13 は、胴部全体にカキメ調整、胴部中位には縦3本、横3本のへラ記号が格子状に施されている。口頸部は細く外反して立ち上がり、外面中位には2本の凹線が巡る。口径 5.9cm、器高 17.6cm、体部最大径 12.1cm、最大幅 10.1cm を測る。13 の口縁部は調査中に確認されたが、胴部は宅地造成工事中、墳丘東側を通る道路際の側溝付近から出土した。詳細な出土位置は明確ではないが、玄室の南側からの出土と考えられる。



第8図 出土遺物実測図1

31 は坏蓋、32 は坏身である。これらは、13 と同様に宅地造成工事中に確認された。場所は、玄室と道路の境とみられる。31 は、天井部はなだらかな丸味を帯び、口唇部は丸くおさめる。口径・器高は、12.3cm・4.0cm を測る。32 は、底部はゆるやかな丸味を帯びて立ち上がり、受部は水平に短くのびる。口径・器高は、10.3cm・3.6cm を測る。

前庭部 前庭部から出土した須恵器は 14~30 である。器種は、坏身、高坏、腿、短頸壺、直口壺に分類 される。中でも高坏が多く出土している。

14 は 坏身である。底部の中央が平らで丸く立ち上がり、受部は水平に短く突き出す。器高は低くなり、3.4cm を測る。口径は、11.3cm を測る。

15~20 は、有蓋高坏である。15~17 は長脚で、2段3方向の透孔を有する。上下段の間と下段透孔直下に明瞭な2本の凹線が巡る。16の下段に巡る凹線は1本である。裾部は大きく開き、端部は下方に突き出る。坏部は、底部からゆるやかな丸味を帯びて立ち上がる。受部は斜上方に短く突き出し、口縁部は短く内傾する。口径・器高は、15が13.2cm・17.8cm、16が13.3cm・18.6cm、17は12.6cm・18.1cmを測る。18~20は短脚で、透孔はない。脚部の接合部から大きく開く。18の端部は上方に折り曲げ、19・20は丸くおさめる。

21~26は無蓋高坏である。21の脚部は、2段3方向の透孔を有する。上下段の間と下段透孔直下に明瞭な2本の凹線が巡り、その下の裾部に段をなす。坏部は、底部からゆるやかな丸味を帯びて立ち上がり、口唇部は外反する。外面中位には2本の凹線が巡る。22・23は長脚で、2段2方向の透孔を有し、上下段の間と下段透孔直下に明瞭な2本の凹線が巡る。坏部は、外面に2段の稜が巡る。24の脚部は、2段2方向の透孔を有し、上下段の間に2本、下段透孔直下に1本の凹線が巡る。坏部は、底部が平らで口縁部に向かって直立気味に立ち上がり、口唇部がやや外反する。外面中位に1本の凹線が巡る。25は、脚部は2段3方向の透孔を有し、上下段の間に明瞭な2本の凹線が巡る。坏部は、底部から中位まで丸味を帯び、口縁部は直立気味にやや開く。外面中位に2本の沈線が巡る。26は、小型の高坏である。坏部は浅く、口唇部が強く外反する。

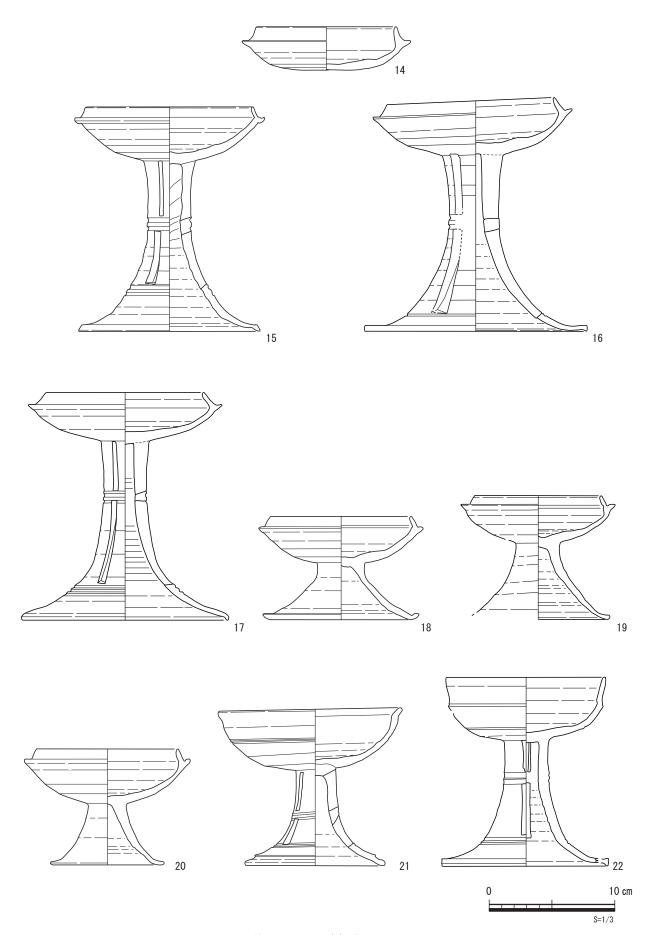
28・29は短頸壺である。28は、胴部は丸味を帯び、中位まで回転ヘラケズリ調整を行う。中位には2本1組の凹線が巡り、その間に刺突文を施す。口頸部は短く直立する。29は、肩部の張りが強く、中位まで回転ヘラケズリ調整を行う。口頸部はやや内湾気味に短く立ち上がる。

30は直口壺である。底部がやや丸く、肩部の張りが強い。中位まで回転ヘラケズリ調整を行う。頸部は 直線的にやや開き気味に伸び、口縁部で若干内湾する。

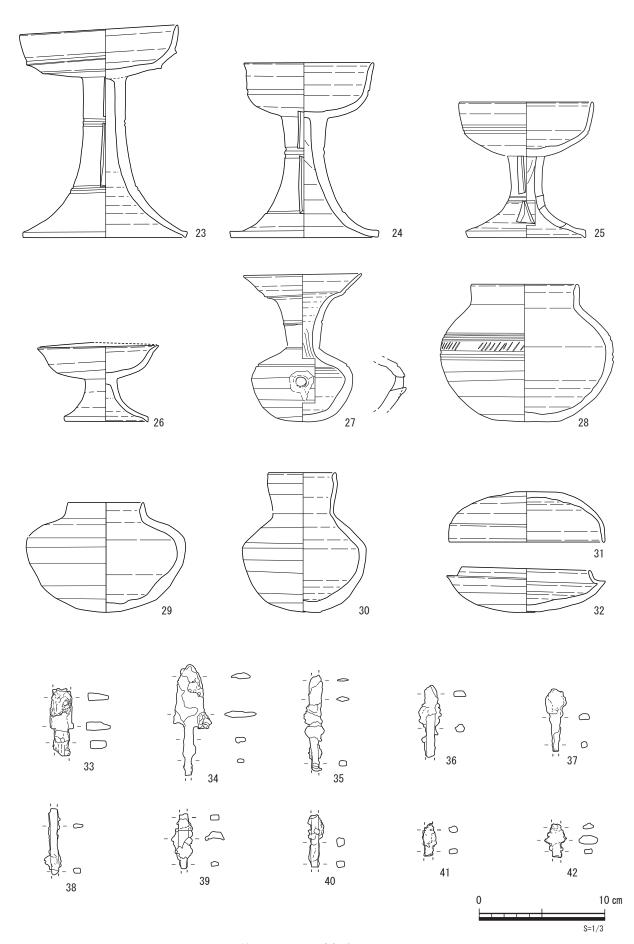
第3節 金属製品(33~51)

33は刀子である。身の先端部及び茎の先端部が欠損しており、全長や形状は不明である。関は棟関と刃関がみられる。

34~42は鉄鏃である。34は有頸鏃である。鏃身部が三角形で、鏃身関が角関となる。35~42は長頸鏃の



第9図 出土遺物実測図2



第10図 出土遺物実測図3

頸部もしくは茎部とみられる。いずれも欠損しており、鏃身部の形状は不明である。

43は鉄製の素環状鏡板付轡である。鏡板本体の環に、引手の端環と銜先の環とを別々に独立させて連結している。鏡板は、直径7.3~8.3cmのやや楕円形を呈する。銜は、両端が環状をした鉄棒を2本連結している。立聞は、鏡板に造り付けられていない連結式で、2連の兵庫鎖が確認されている。引手は、1本の鉄条で、柄と壺部が一体となっており、先端が「く」の字に屈曲する。

44~49は鉄製の鐙吊金具である。44・45は、連結された絞具と兵庫鎖三連が残存する。絞具は、鉄棒を 馬蹄形に曲げ下部に横棒をさし、その中央に刺鉄をつける。45は、鋲が残るU字形金具が連結される。U 字形金具の幅は、端部に向かうほど広くなり、最小幅0.9cm、最大幅1.6cmを測る。46はU字形金具、47 ~49はU字形金具の鋲と考えられる。

50は鉄製の捩じり環頭部である。半円形に近い形状を呈し、端部はやや細くなる。捩じり部分は、端部を除いた全体に見られる。51は三輪玉である。半分以上は欠損しており、全長は不明である。金銅製とみられる。

第4節 玉類 (52~120)

52~58は、瑪瑙製の勾玉である。形状はC型で、頭部と尾部に丸みを帯び、顎や尾部の先端がやや尖り 気味である。穿孔は、断面が円錐形で片側から施されている。方向は一定ではなく、56・57のみ別方向から行われている。53は、未貫通の穿孔痕が残り、すぐ隣に改めて穿孔を施す。表面は、全体的に研磨が施されているが、勾玉の形状に近づける際の剥離とみられる削痕が残る。長さは、52~57が3cm前後、58が4.4cmを測る。

 $59\sim85$ はガラス玉である。平面は不整円形を呈し、上・下面は平坦になるが必ずしも水平ではない。側面は丸みを帯びる。厚みは一定ではなく、個体により差がある。色は濃い藍色が多く、一部で水色が確認される。直径 $7\sim9.5$ mm、厚さ $4\sim7.5$ mmの大きさである。86はガラス小玉である。直径 3mm、厚さ 2mmの大きさであり、滑石製の臼玉よりさらに小型である。色は薄緑色である。

87~120は滑石製の臼玉である。平面形は比較的整った円形を呈する。大きさは、直径が4.35~7.8 mm と個体により差がある。厚みも2.3~6.1 mmを測り、一定ではない。側面は、研磨が施され直線的に加工されている。端面は、上下が水平になるものと、片面のみ水平になるものとに分類される。臼玉は、全てふるいによる選別作業により確認された。

参考文献

愛知県教育委員会『愛知県史 別編 窯業 1 古代猿投窯』2015年

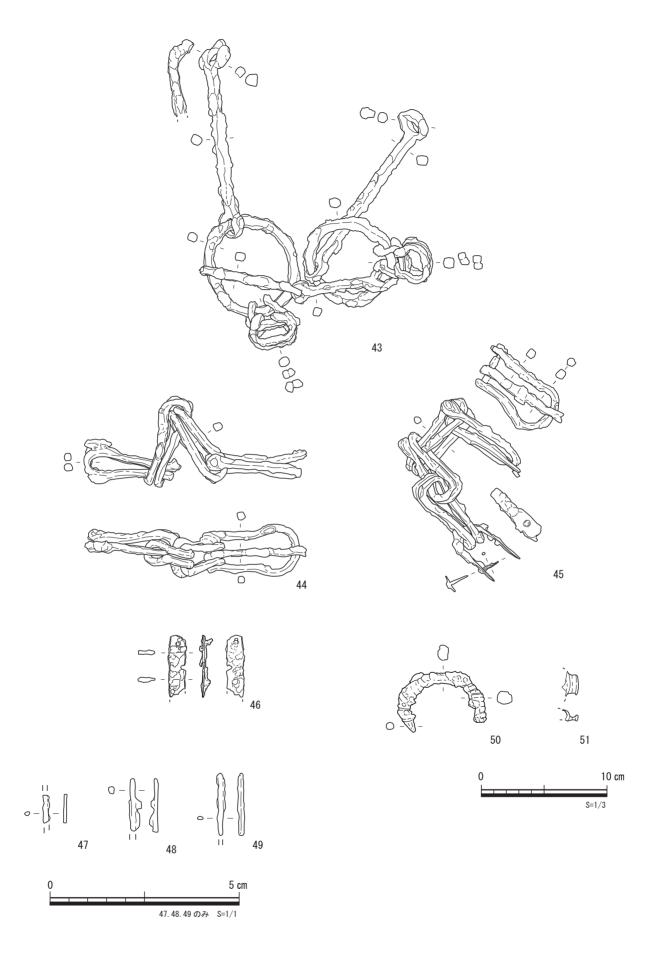
大川清・鈴木公雄・工楽善道編『日本土器辞典』1996年

岡安光彦「いわゆる素環の轡について 環状鏡板付轡の型式学的分析と編年」『日本古代文化研究創刊号』古墳文化研究会 1984 年 川畑純『武具が語る古代史 古墳時代社会の構造』京都大学学術出版 2015 年

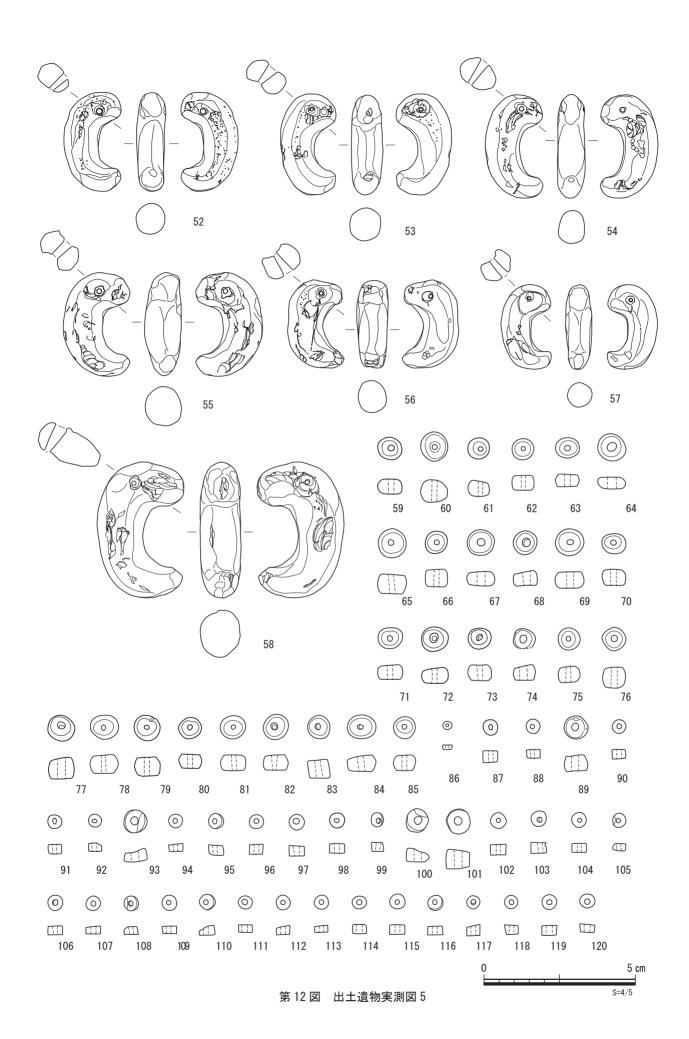
各務原市教育委員会『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』1984年

中村浩『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』2001年

本巣郡糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会『船来山古墳群』1999年



第11図 出土遺物実測図4



報告書No.	種別	部位	出土場所	胎土	口径(cm)	底•台径(cm)	器高(cm)	その他の径(cm)
注記No.	機種	破片数	焼成	色調		備	考	
1	須恵器	ほぼ完形	玄室内	密	13		4.6	
103	坏蓋	4	良好	2.5Y6/1 黄灰	天井1/2まで		ヘラケズリ調整	
2	須恵器	天井部~口縁部	玄室内	密	12.6		(4.3)	
130-1	坏蓋	2	良好	5YR5/3 にぶい赤褐		•		
3	須恵器	1/2強	玄室内	普通	13.4		4.3	
115	坏蓋	24	やや不良	5Y7/1 灰白	天井3/4まで[コクロ右回転のイ	トラケズリ調整	
4	須恵器	ほぼ完形	玄室内	普通	12.9		4.4	
99	坏蓋	7	やや不良	5Y6/1 灰	天井2/3まで[コクロ右回転のイ	トラケズリ調整	
5	須恵器	完形	玄室内	普通(白色砂粒が混じる)	12.3		3.8	
97	坏蓋	1	良好	5Y5/1 灰	天井3/4まで[コクロ右回転の/	トラケズリ調整	
6	須恵器	ほぼ完形	玄室内	普通(白色砂粒が混じる)	10.9	3.2	4.4	受部径13
104	坏身	1	良好	10Y6/1 灰	底部1/2まで	コクロ左回転のイ	ヘラケズリ調整	
7	須恵器	完形	玄室内	密(白色砂粒が混じる)	11.4	3.3	4.4	受部径13.1
106	坏身	1	良好	10YR5/2 灰黄褐	底部1/2まで(コクロ左回転の/	ヘラケズリ調整	
8	須恵器	ほぼ完形	玄室内	密(白色砂粒が混じる)	11.4	4.2	4.2	受部径12.8
105	坏身	5	良好	5Y5/1 灰	底部1/2まで	コクロ左回転の/	ヽラケズリ調整	
9	須恵器	ほぼ完形	玄室内	密	11	5.7	4.4	受部径13.3
98	坏身	2	良好	5Y6/1 灰	底部3/4まで[コクロ右回転の/	ヽラケズリ調整	
10	須恵器	ほぼ完形	玄室内	粗	11.5		5.9	
101	無台坏	1	やや不良	10YR7/2 にぶい黄橙	回転ヘラケズリ	ノ調整、頂上部に	不定方向のケ	ズリ調整
11	須恵器	坏部	玄室内	普通	10.2		(4.5)	
108	高坏	13	やや不良	2.5Y7/1 灰白				
12	須恵器	2/3	玄室内埋土	普通			(19.2)	最大径16.6/最大幅13
117-1	提瓶	23	やや不良	2.5Y6/1 黄灰	環状把手がつぐ	<		
13	須恵器	ほぼ完形	玄室内	密(白色砂粒が混じる)	5.9		17.6	最大径12.1/最大幅10.1
136-4	提瓶	22	良好	5Y5/1 灰	フラスコ形			
14	須恵器	□縁部~底部	前庭部	密(白色砂粒が混じる)	11.3	4.4	3.4	受部径13.4
59	坏身	2	良好	7.5Y7/1 灰	底部2/3まで[コクロ右回転のク	ヘラケズリ調整	
15	須恵器	口縁部~脚端部2/3		密	13.2	14.3	17.8	
116	有蓋長脚高坏	7	良好	5Y7/1 灰白				
16	須恵器	口縁部~脚端部2/3	前庭部	密	13.3		(18,6)	
7	有蓋長脚高坏	23	良好	2.5Y7/1 灰白				
17	須恵器	口縁部~脚端部2/3	前庭部	普通	12.6	16.4	18.1	
9	有蓋長脚高坏	15	やや不良	5Y7/1 灰白				
18	須恵器	□縁部~脚端部 1/2	前庭部	普通	13	13	8.2	
65	有蓋短脚高坏	5	良好	N6/0 灰				
19	須恵器	□縁部~脚端部2/3	前庭部	普通	10.1	(11.4)	9.8	
50-2	有蓋短脚高坏	14	良好	5Y6/1 灰				
20	須恵器	□縁部~脚端部1/3	前庭部	密	11	9	9.2	
50-1	有蓋短脚高坏	5	良好	2.5Y6/1 黄灰				
21	須恵器	完形	前庭部	普通	14.4	11	12.5	
38	無蓋長脚高坏	11	良好	5Y5/1 灰				
22	須恵器	口縁部~脚端部2/3	前庭部	密	12.6	13.4	15	
3	無蓋長脚高坏	13	良好	7.5Y6/1 灰				
23	須恵器	□縁部~脚端部2/3	前庭部	密	12.5	13	16.8	
6	無蓋長脚高坏	26	良好	5Y7/1 灰白				
24	須恵器	ほぼ完形	前庭部	普通	10.3	11.8	14.1	
1	無蓋長脚高坏	5	やや良好	10YR7/2 にぶい黄橙				
25	須恵器	□縁部~脚端部	前庭部	普通	10.5	9.4	10.8	
4	無蓋長脚高坏	12	良好	7.5Y6/1 灰				

第1表 須恵器観察表1

報告書No.	種別	部位	出土場所	胎土	口径(cm)	底•台径(cm)	器高(cm)	その他の径(cm)		
注記No.	機種	破片数	焼成	色調		備考				
26	須恵器	ほぼ完形	前庭部	普通	9.6	6.6	6.3			
2	無蓋短脚高坏	4	やや不良	10YR6/1 褐灰				·		
27	須恵器	ほぼ完形	前庭部	密	9.4	3.6	11.8			
35	郞	10	良好	5Y7/1 灰白				·		
28	須恵器	ほぼ完形	前庭部	普通	8.4	5.3	10.9	最大幅13.7		
73	短頸壺	23	良好	5Y6/1 灰						
29	須恵器	□縁部~底部2/3	前庭部	普通	6	3.7	8.7	最大径12.7		
74	短頸壺	14	不良	2.5Y7/1 灰白						
30	須恵器	ほぼ完形	前庭部	粗(中心部生焼け)	5.4	2.5	11.1	最大径9.8		
36	直口壺	12	やや不良	10YR7/1灰白						
31	須恵器	2/3	道路工事際おそらく玄室近く	粗	12.3		4.0			
168	坏蓋	4	不良	5Y7/1 灰白	頂上部に不定力	方向のケズリ調整	文 E			
32	須恵器	3/4	道路工事際おそらく玄室近く	粗	10.3	3	3.6	受部径12.6		
169	坏身	9	不良	5Y7/1 灰白	頂上部に不定方向のケズリ調整					

第2表 須恵器観察表2

報告書No.	種類	*D144	l++ +v
注記No.	出土場所	規模	備考
33	刀子	現長=5.4cm 現刃部長=3.2cm 現茎部長=2.2cm 刃部厚=0.7cm	
156-5	ふるい床下	茎部厚=0.8cm	
34	鉄鏃	現長=8.8cm 鏃身部長=5.0cm 現茎部長=1.4cm 刃部厚=0.5cm	
95	玄室内	茎部厚=0.3cm 頸部長=2.4cm 関幅=0.7cm 茎幅=0.5cm	
35	鉄鏃	 現長=7.6cm 頭部厚=0.35cm 茎部厚=0.45cm	
93	玄室内		
36	鉄鏃	 現長=5.7cm 刃部厚=0.5cm	
150-3	ふるい		
37	鉄鏃	 現長=5.0cm 刃部厚=0.5cm	
150-5	ふるい	成及一S.Odii 25m字一O.Odii	
38	鉄鏃	 現長=5.3cm 刃部厚=0.4cm	
150-4	ふるい	O,Ooii کیاہو — O.Toii	
39	鉄鏃	 現長=4.4cm 刃部厚=0.4cm	
114	玄室内	7. Tolii 7.	
40	鉄鏃	 現長=4.2cm 刃部厚=0.5cm	
150-6	ふるい		
41	鉄鏃	 現長=2.6cm 刃部厚=0.4cm	
150-1	ふるい	別成一と.Odii 73gpg - O.+dii	
42	鉄鏃	 現長=2.6cm 刃部厚=0.4cm	
150-2	ふるい	202 2.00m /30p/g 0.10m	
43	素環状鏡板付轡	銜長=15.6cm 引手長=16.1、15.8cm 鏡板径=7.2~8、7.3~8.3cm	
96-1	玄室内	立聞高=4.7、4.4cm 引手壺径=2.6、2.8~3cm	
44	鐙吊金具	 絞具長=8.5cm - 鎖長=6.9、7.3、7.7cm	
96-2	玄室内		
45	鐙吊金具	絞具長=8.1cm 鎖長=6.6、6.8、7.8cm U字金具長=5.3cm	
96-3	玄室内	U字金具幅=0.9~1.5cm	
46	鐙吊金具	·現長=4.9cm	U字形金具
154-2,3	ふるい		
47	鐙吊金具	現長=0.8cm 幅=0.1cm	U字形金具鋲
145-6	ふるい		
48	鐙吊金具	現長=2.4cm 幅=0.15cm	U字形金具鋲
145-7	ふるい		
49	鐙吊金具	現長=2.7cm 幅=0.1cm	U字形金具鋲
145-8	ふるい		
50	捩じり環頭大刀	捩じり環頭部 現長=4.8cm 最大幅=7.0cm 断面厚=1.2cm	
94	玄室内	pi以一寸,Ooii gx/Y=1,Ooii 町田子一1,Zoii	
51	三輪玉	現長=1.3cm 幅=2cm 高さ=0.9cm 厚み=0.1cm	金銅製
171-1	玄室内		

報告書 No.	種類	遺構名	色調	長径 (mm)	短径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	備考
52	勾玉	玄室内	橙色	長さ 32.5	幅 18.5	9	2~ 3.5	6.85	瑪瑙製
53	勾玉	玄室内	橙色	長さ 32	幅 17.0	9	1~4	7.74	瑪瑙製
54	勾玉	玄室内	橙色	長さ 34	幅 18.0	15	3	7.28	瑪瑙製
55	勾玉	玄室内	橙色	長さ 33	幅 23.0	11	4	9.49	瑪瑙製
56	勾玉	玄室内	橙色	長さ 30	幅 18.0	10	3	7.37	瑪瑙製
57	勾玉	玄室内	橙色	長さ 28	幅 16.0	8	2	4.64	瑪瑙製
58	勾玉	玄室内	橙色	長さ 44	幅 23.0	13	1~4	19.94	瑪瑙製
59	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	8	7.5	5	2	0.47	
60	ガラス玉	玄室内	水色(濃)	9.8	9.1	7.5	2	0.88	
61	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	7		6.1	1.5	0.45	
62	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	8	7.5	5.4	1.5	0.46	
63	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	7.6	7	4	2	0.35	
64	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	9.3	8.75	4.15	3	0.46	
65	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	9.85		6.5	1.5	0.91	
66	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	7.5		6	1.5	0.45	
67	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	9	8.5	4.4	2.7	0.47	
68	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	8	7.65	4.6	2.5	0.41	
69	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	9.3	8,8	5.8	1.6~2	0.71	
70	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	8	7.1	5.5	1.8	0.47	
71	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	8	7	5.5	2	0.44	
72	ガラス玉	玄室内	あい色(薄)	9	8	5	2	0.51	
73	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	7.8	6.8	5.5	1.5	0.43	
74	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	7.2		4.8	2.5	0.34	
75	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	7.4	7.1	5.35	1.5	0.43	
76	ガラス玉	玄室内	あい色(薄)	7.7		6.75	2	0.55	
77	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	9.4	8.6	6.8	2.5	0.78	
78	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	9.3	8.1	6.3	1.5	0.68	
79	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	8.85	8.1	6.7	1~1.8	0.7	
80	ガラス玉	玄室内	あい色(薄)	7.5		4.8	1.5	0.37	
81	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	8.4	7.3	5	1.5	0.46	
82	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	8.55	8	5.1	1	0.54	

報告書 No.	種類	遺構名	色調	長径 (mm)	短径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	備考
83	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	7.8		7	2	0,63	
84	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	9.2	7.8	5.5	2	0.57	
85	ガラス玉	玄室内	あい色(濃)	7.2		5.2	1.5	0.38	
86	ガラス玉	玄室内	水色	3		2	1	0.02	
87	三五	玄室内	薄	5		3.7	1~1.5	0.16	
88	田玉	玄室内	濃	5	4.6	2.7	1.5	0.1	
89	三玉	玄室内	濃	7.5		5.7	2.5	0.48	
90	田玉	玄室内	濃	4.5		2.9	2	0.09	
91	三玉	玄室内	濃	4.8		3	1~1.8	0.1	
92	三玉	玄室内	濃	4.35		2.65	2	0.07	
93	三玉	玄室内	薄	7.8		3.4	2	0.29	
94	三玉	玄室内	濃	4.5		2.5	1.5	0.08	
95	田玉	玄室内	濃	4.9		3.15	2	0.11	
96	歪臼	玄室内	濃	4.6		3.1	1.5	0.11	
97	田玉	玄室内	薄	5.1		3.5	2	0.16	
98	田玉	玄室内	濃	5		5	1.5	0.12	
99	田玉	玄室内	濃	4.9		3	1.5	0.11	
100	三玉	玄室内	薄	7.7		4.5	2.5	0,35	
101	三玉	玄室内	薄	8		6.1	2.5	0,63	
102	三田	玄室内	濃	5		3.4	1.5	0.16	
103	三田	玄室内	濃	5		3.4	1.5	0.15	
104	三三	玄室内	薄	4.8		3	1.5	0.12	
105	三三	玄室内	薄	5		2.3	1.5	0.07	
106	三王	玄室内	濃	4.8		2.8	1.5	0.13	
107	三王	玄室内	濃	4.8		2.8	1.5	0.1	
108	包玉	玄室内	濃	5		3	1	0.1	
109	包玉	玄室内	濃	4.9		3.2	1.5	0.1	
110	三王	玄室内	濃	5.1		3	1.5	0.11	
111	三王	玄室内	濃	4.6		2.7	2	0.1	
112	臼玉	玄室内	濃	4.85		3.1	1.5	0.12	
113	三三	玄室内	濃	4.65		2.4	1.5	0.08	
114	三田	玄室内	薄	4.4		3.1	2	0.1	
115	三田	玄室内	薄	5		3	2	0.12	
116	三田	玄室内	濃	4.8		3.1	1.5	0.13	
117	三田	玄室内	濃	4.4		3.6	1.5	0.1	
118	臼玉	玄室内	濃	4.4		3.1	1.5	0.11	
119	田玉	玄室内	濃	5.1		3.1	2	0.13	
120	田玉	玄室内	濃	5.1		2.5	1.5	0.09	

第4表 玉類観察表

第4章 まとめ

第1節 古墳の築造年代について

本古墳からは、第3章で述べたように須恵器や鉄製品、そして玉類などの遺物が出土している。その中でも須恵器は完形に近い残存状態で、型式分類による編年の可能な資料である。ここでは、須恵器の型式編年から位置付けを行い、古墳の築造年代について考えを述べたい。

参考にする型式編年は、蓋坏とその他の器種で分けることとした。蓋坏の編年については、渡邉博人が提案した編年案(1)により考察する。それによると、美濃地域の須恵器の蓋坏は、畿内系・尾張系・美濃系の三系統に分類される。畿内系は畿内で生産された畿内型あるいはその系譜を引く畿内系蓋坏、尾張系は尾張猿投窯を中心とする地域で生産された蓋坏、美濃系は美濃須衛窯における最古の須恵器窯である各務原市蘇原6号窯を初源とした蓋坏を指している。渡邉は、3系統10型式に区分し、畿内系は2~6型式、尾張系は2~7型式、美濃系は6~10型式の編年案を提示した(以下、「渡邉編年」)。

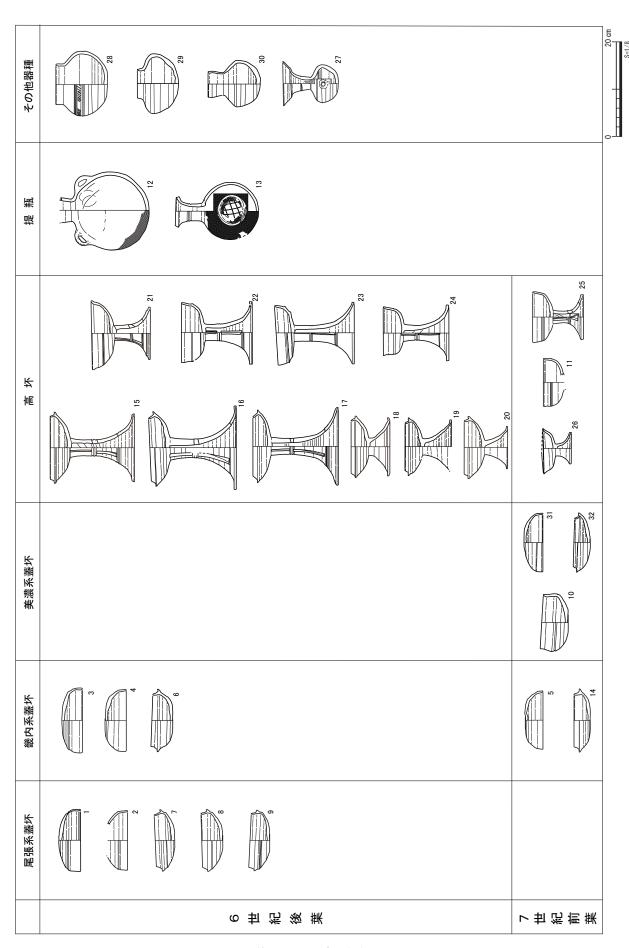
その他の器種については、大阪府和泉陶邑窯の田辺・中村編年や尾張猿投窯の編年、また、西濃の本巣 市に所在する船来山古墳群の型式編年を参考にした。

須恵器は、玄室と前庭部の2箇所から出土している。玄室からは16点が確認されており、その中で蓋坏が10点と多く、半数以上を占める。蓋坏は、天井部と口縁部との境および底部と受部の境に稜をなす尾張系、稜を省略し色調が灰色及び灰青色の畿内系、そして色調が灰色で胎土の異なる美濃系に大別した。

尾張系の蓋坏は、 $1 \cdot 2 \cdot 7 \sim 9$ が該当する。渡邉編年の尾張4型式に近い規模であるが、蓋の口縁端部内側の段に粗雑化がみられ、天井部と口縁部との境にある稜も甘くなることから、尾張5型式に相当すると考えられる。畿内系の蓋坏は、 $3 \sim 6 \cdot 14$ が該当する。蓋の口縁端部は面取りが粗雑化して丸く収める形状から、 $3 \cdot 4 \cdot 6$ は渡邉編年の畿内5型式に相当すると考えられる。また、 $5 \cdot 14$ は、坏の受部が水平に突き出すことや、蓋の天井部が扁平になること、そして法量が縮小することから、田辺編年のTK209型式、中村編年のII-6型式に相当すると考えられる。美濃系の蓋坏は、 $10 \cdot 31 \cdot 32$ が該当する。天井部及び底部外面の回転へラケズリ調整が施されなくなることから、渡邉編年の美濃7型式に相当すると考えられる。

提瓶では、頸部が細長く口縁部がラッパ状に開く、いわゆるフラスコ形提瓶が出土している。6世紀後半以降に認められ、愛知県猿投山西南麓窯跡群を中心として生産されたものと指摘されている(2)。美濃地域では美濃須衛窯Ⅱ期の終わりに出現し、Ⅲ期に入ると見られなくなる非常に限定的な器種であるとされており(3)、蓋坏で確認された尾張・畿内5型式もしくは美濃7型式のいずれかに共伴する遺物である。

前庭部から出土した須恵器は16点が確認されている。そのうち12点が高坏であることから、高坏を中心とした墓前祭祀が行われたと推定される。有蓋と無蓋に分けられ、透かし孔を持つ長脚と透かし孔の無い短脚の2種類に分類できる。有蓋長脚は2段の透かし孔を持ち脚部の裾が大きく開く形状、有蓋短脚は透かし孔がなく脚部の接合部から開く形状から、いずれも田辺編年のTK43型式期、中村編年のII – 4型式期、船来山古墳群のIV期に相当する。無蓋高坏は、坏部外面の形態や脚部の透かし孔、巡らされる凹線の有無により、船来山古墳群のIV期及びVI期の2時期に分類できる。



第13図 須恵器編年図

高坏の他には、
碌・直口壺・短頸壺が出土している。
時期の特定には至らないが、
船来山古墳群のIV期から
V期に相当すると考えられる。

以上、須恵器の型式編年を述べた。それぞれ異なる編年を参考にしたが、渡邉の考案した編年対照表(表5)によると、尾張5型式・畿内5型式・TK43型式・II - 4型式期の群と、TK209型式・美濃7型式の群の2時期に分類できる(第13図)。遺物の出土量は圧倒的に前者が多く、最初の埋葬に伴うものと考えられ、築造年代は6世紀後葉と推定される。また、7世紀前葉の遺物も出土していることから、この時期に追葬されたことも考えられる。

第2節 山後2号墳の特徴と位置付け

山後2号墳は、玄室や羨道部の側壁が大きく崩落していたが、最下段の石材が残存していたため、石室の形状や規模の把握が可能であり、その特徴を掴むことができた。発掘調査によって明らかとなった石室の特徴をまとめると以下の通りである。

- 1 玄室の平面形は胴張を呈する
- 2 無袖式石室である
- 3 玄室と羨道の境に梱石、片側壁に立柱石が据えられる
- 4 前庭部が長大化し、開口部に向けて「ハ」の字状に開く
- 5 石室は現存長9.6mを測る

美濃地域の石室については、成瀬正勝(1985)や中井正幸(1992)、横幕大祐(2011)らによって研究が行われ、河川流域ごとに系譜や変遷がまとめられている。調査で明らかとなった石室の特徴と比較し、山後2号墳の位置付けについて検討する。

美濃地域における石室の形態から、畿内系石室の片袖式石室(以下、「片袖式」)と両袖式石室(以下、「両袖式」)、それ以外の非畿内系石室の2種類に大別される。非畿内系石室は、北部九州の石室に遡源できる三河系石室で、6世紀中葉に西三河において成立した石室の特徴が広範囲に共有された形態であると指摘されている(4)。

上述した山後2号墳の特徴1・2は三河系石室に当て嵌まる特徴であり、畿内ではみられない形態である。また、特徴3の立柱石においても、三河系石室の特徴であり、玄門及び羨門に立てられ内側に突出させることで、擬似両袖式石室を造り出す構造である。しかし、山後2号墳の立柱石は、玄室の側壁と比較すると石材が小さく、片側の側壁のみに用いられており、内側に突出していないことから、袖の役割を果たしていないと考えられる。これは、玄門立柱石が地域に伝播して取り込まれ、形骸化したのではないかと推定される。

特徴4である前庭部の長大化と「ハ」の字状に開く傾向は、美濃地域では6世紀前半の各務原市大牧5号墳において確認されており、以降TK217型式期まで継続する形態である。前方後円墳や大型方墳を始め、美濃市塚穴1号墳のように古墳群内における盟主墳と位置づけられる円墳にも採用されている。長大化する前庭部は、首長墳だけではなく、ある一定の階層以上の古墳に採用されていると考えられる。

古墳の階層は、墳丘・石室の規模、石棺の形状、副葬品の所有形態等の構成要素によって表現されると 指摘されている(5)。美濃地域の片袖式には、威信財である装飾大刀や金銅装馬具の多くが埋葬されている ことから上位の階層に位置すると考えられ、最も下位の階層には無袖式石室(以下、「無袖式」)が位置すると考えられている (6)。

しかし、無袖式である山後2号墳の副葬品は、鉄製捩り環頭部と金銅製三輪玉が出土している。捩り環頭大刀は畿内地域において製作され、各地の豪族へ配布された威信財であると指摘されている(7)。このことから、被葬者は、石室の形態からみると下位の階層に位置するが、畿内との繋がりを持ち、威信財を入手できるほどの力をもった豪族であることが想定される。

第3節 おわりに

山後古墳群はこれまで発掘調査が行われていなかったため、詳細な情報が明確ではなかった。しかし、今回の調査により、本市初の出土事例となる捩り環頭部が出土したことで、古墳群の中でも突出した古墳であることが明らかとなった。捩り環頭大刀は、岐阜県では船来山272号墳と虎渓山1号墳の2例しかないほど出土事例が少ない遺物である。そのため、残存する他の山後古墳から出土する可能性は限りなく低いと考えられることから、威信財を持つ山後2号墳が古墳群の盟主墳であると言える。

有力古墳の築造に至る背景には何が考えられるであろうか。川沿いに分布する古墳群であることから、 水運に関わる集落があったのかもしれない。今後の調査・研究により、境川沿いに展開していた古墳時代 の様相を詳細に把握されることが期待される。

型式			美濃須衛窯			猿投窯	陶邑窯		
4	Α	В	C	夫	很	須倻羔	齋藤	田辺	中村
1				I 期			H-11	TK-47	I-4 • 5
2							H-61	MT-15	II -1
3				П			H-01	TK-10	II-2
4							+		П-3
5				期			H-44	TK-43	II-4
6					後半	蘇原6(古)	H-44	TK-209	II -5
7				Ш	前	- 3	H-50	1K-209	II-6
8					半	須衛65	H-90	TK-217	/ Ⅲ −1
9					後		1.187.13	TK-46	Ш-2
10		1		期	半	那加5	I-17(古)	TK-48	III -3

(A=尾張系、 B=畿内系、 C=美濃系)

第5表 後期古墳時代須恵器編年対照表 (渡邉試案)

註

- (1) 渡邉博人 「美濃の後期古墳出土須恵器の様相 蓋坏の型式設定とその編年試案」『美濃の考古学創刊号』pp.62~87 1996 年
- (2) 池上悟 「古墳出土の須恵器について フラスコ形提瓶」『立正大学人文科学研究所年報 (23)』 p.9 1985 年
- (3)渡邉博人 「須恵器と後期古墳」『美濃の後期古墳』美濃古墳文化研究会 p.32 1992年
- (4) 鈴木一有 「東海の横穴式石室における分布と伝播」『研究集会近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会 pp.270・271 2007年
- (5) 大谷宏治 「階層構造論 階層構造からみた東海の後期古墳」『第8回東海考古学フォーラム三河大会 東海の後期古墳を考える』pp.429・430 2001年

- (6)横幕大祐 「美濃地方における後期古墳の状況」『第8回東海考古学フォーラム三河大会 東海の後期古墳を考える』p.226 2001 年
- (7) 岩原剛 「副葬品の変質 東海地方における後期古墳の副葬品から」『第8回東海考古学フォーラム三河大会 東海の後期古墳 を考える』pp.408・409 2001年

参考文献

愛知県教育委員会 『愛知県史 別編 窯業 1 古代猿投窯』 2015年

大川清・鈴木公雄・工楽善道編 『日本土器辞典』 1996 年

各務原市教育委員会 『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』 1984 年

各務原市教育委員会 『大牧 5 号墳発掘調査報告書』 2001 年

菊池芳明 「古墳時代環頭大刀集成」 大阪大学大学院文学研究科 2014年

関市教育委員会 『国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺東遺跡Ⅲ』 2015年

多治見市教育委員会 『虎渓山1号古墳発掘調査報告書』 1996年

田辺昭三 『須恵器大成』 1981 年

中村浩 『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』 2001年

美濃市教育委員会 『塚穴古墳群発掘調査報告書』 1993年

本巣郡糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会 『船来山古墳群』 1999 年

渡邉博人 「須恵器と横穴式石室の関係」『東海学セミナー(2)東海の横穴式石室を考える』 2006年